

『BEACON 2015 Look Up! みあげてごらん』

室井 尚

「BEACON」は、1999年以降、名古屋、東京、京都などで断続的に展示されてきた映像・音響・テキスト・美術が渾然一体となったインスタレーション作品である。それは小杉美穂子と安藤泰彦（KOSUGI+ANDO）の美術、伊藤高志の映像、稲垣貴士の音響、吉岡洋のテキストや声によって構成されているが、中心となるのは回転する二台のプロジェクターが周囲の壁に映像を投影する装置である。この回転装置は撮影にも用いられ、複数の風景の映像が会場の壁にまるで灯台が放つ光のように投影される。それは時々逆戻りをしたり静止したり急に加速したりすることもある。

面白いのは、テーマに関連したさまざまな場所で撮られた風景以外に、必ず会場それ自体の映像が現実の壁に重ね合わされることだ。たとえば、会場の扉が突然開いて、そこから人物が出入りする映像が現実の扉に重ね合わされる。だから、普通の映像作品とは異なり、観る者は映し出された過去の風景とまさにいま自分がいる展示会場そのものが重なったりズレたりする不思議な感覚にさらされることになる。そしてそれは過去の記憶と、いまここで知覚している現実との往還作用を促すのだ。この意味で、BEACONは他のインスタレーション作品とは比較できないまったくオリジナルな「メディア」なのである。

前回2014年に東京・入谷の葬儀場で展示された『BEACON 2014 memento』では、実際に置かれている棺桶とぴったりと重なる映像の棺桶に、吉岡洋が出入りする映像が重ねられ、かつてそこで起こった記憶の光景が、現実の葬儀場や周辺の日常の空間と重層的に重なりあい、つよく生者と死者の空間の往還を意識させるものだった。

今回の「BEACON 2015」では、壁に架けられた沢山の人たちが空を見上げる映像のある通路を通り過ぎると、次の部屋では沖縄の基地を強く想起させるフェンスの内側から天井にサーチライトのような光が当てられている。そしてBEACONの展示室においては、沖縄の風景、福島風景などがいま私のいる岐阜県美術館の展示室そのものの壁の映像に重ね合わされ、いまそこには居ない作者たちの姿が見え隠れしていた。

「基地」、「福島」という私たちを取り囲む困難な現実と、そこに生きる人々のごく日常的な風景、そして観客としての私たちがいまここにいる美術館の現実の空間とが、「みあげてごらん」というコンセプトの下で、まるでちぎれた雲がゆっくりと重なりあうようにして結びつく—そんな特権的な時間がそこには流れていた。